

千住 博 日本画家／京都造形芸術大学大学院教授  
森井 毅 株式会社たづアート 代表取締役社長

# 概念や枠組みを超え 日本画を未来へつなぐ

京都造形芸術大元学長で

現在も同大大学院教授として後進の指導に当たる千住博氏は、京都にゆかりの深い日本画家です。

大徳寺塔頭 聚光院の襖絵「ウォーターフォール」が一般公開され、見る人に自然や人間について問い掛けました。

千住博氏の芸術の魅力について

たづアートの森井毅社長が話を伺いました。



森井 毅



自身の作品の前に立つ千住博氏と森井毅社長

千住 博（せんじゅ ひろし）  
1951（昭和26）年東京都生まれ。東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。元京都造形芸術大学学長。現在は同大大学院教授。09年「エネテア」ビエンナーレ名誉賞受賞。2016年外務大臣表彰受賞。17年第4回「イサム・ノグチ賞」受賞。たづアートとは30年先のつきあい。

森井 毅（もりい つよし）  
1964（昭和39）年東京都生まれ。2008年たづアート代表取締役社長。10年五部美術商連合会21世紀展審査委員。15年京都美術商相互会会長。16年五部美術商連合会 副会長兼審査委員。



大徳寺塔頭 聚光院 ©Nacasa & Partners Inc.

株式会社 たづアート

京都市東山区三条通神宮道西入西町138-1  
Tel:075-771-8225 http://tazuart.com/

## ■ 現代を描くということ

森井◎大徳寺塔頭 聚光院の襖絵「ウォーターフォール」ですが、その前の聚光院伊東別院（静岡県伊東市）の襖絵からこの作品に行き着くまでの流れをお聞かせください。

千住◎そもそも始末は1997年。当時大徳寺の宗務総長であった小野澤寛海氏から「襖絵を描いてみないか」とお話があり、手始めに伊東別院の襖絵を手掛けました。伊東別院は、有名な建築家・故吉村順三氏の設計で、ガラスとコンクリートのモダンな建物です。ここに滝や波などの襖絵を描き、2003年、東京国立博物館の特別展として初公開されました。そのご縁で京都の本院を手掛けることになったのです。別院と本院を合わせると、実に130面ほどの大プロジェクトでした。

森井◎ご苦労とか、思い出話はありますか？

千住◎別院の襖絵を手掛けたのは、私だけでしたので好き勝手に自由にやらせてもらったのですが、自由ということがいかに不自由であるかを知り、何年もかかって仕上げました。その後、本院の襖絵を描くことになり、また別の重圧を感じました。廊下を隔てた向こう側には狩野永徳とその父・松栄など国宝の絵があり、制作を進めるほどにこれ以上の重圧を抱えることはないだろうと苦しみました。聚光院の襖絵は今年3月まで1年間一般公開されたので、そのプレッシャーはなおさら。描く前から永徳の絵と比べ「千住博の絵は大したことはない」といった声が聞こえてきそう（笑）。

森井◎狩野永徳 松栄の襖絵を見た後、最後に真つ青の「ウォーターフォール」を拝見し、新旧の絵画の鮮やかな対比にとても感動しました。

千住◎そこが私の勝負だったのです。花や鳥や水、何を描いても既に国宝の永徳が勝っていることは確かで、私が唯一勝負できるとしたら永徳には描けない現代しかない。もっと言えば、私の絵から日本画の未来への可能性を感じてくだされば苦しみながら描いた意味があると思っています。

森井◎先生にとって現代を描くとはどういうことですか？

千住◎「ウォーターフォール」に使った色は青と白だけで、絵の具は1000年前からある天然群青と胡粉。絵の具では現代を描く特効薬にはなりません。モチーフである滝も古今東西描かれていて特に現代を語るものでもない。技法やモチーフではなく、永徳が描かなかったものは何だろうかと考えました。現代って何だろうと思いを巡らせ「サイエンス。ということに行き着いたのです。物理学ですね。水や滝を描いた永徳も重力を描くという意識はなかった。だから私は滝を通して重力と水を描くという気持ちで描きました。生命としての水が重力によって落ちたらどうなるのかと、上から下に絵の具を流して実験したのがあの作品で、日本画の中で最も崇高で宇宙を表現できると思う天然群青で描きました。

## ■ 概念や枠を超えることこそ、伝統

森井◎実験という発想もサイエンスそのもの。まさに、日本画の概念を超えた襖絵ですね。

千住◎日本画だけでなく、どの時代のトプランナーもその時代の概念や枠組みを超えていたはず。日本画でいえば、狩野永徳も尾形光琳も伊藤若冲も当時は「こんな絵があるのか」といった新しい技法を使っています。光琳の「紅白梅図屏風」は、いまだにその技法が分からない。ジャンルや既定概念からはみ出していくことが伝統そのもので、次代に手渡しで受け渡していく最も外側にある可能性を広げることこそが、本来意味していた伝統と呼べるのではないのでしょうか。

森井◎2013年に完成した軽井沢千住博美術館（長野県軽井沢町）も美術館の概念を超えていますね。まったく美術館らしくないです。

千住◎西沢立衛氏の設計ですが、美術館の壁はすべてガラス張りです。暗くて閉鎖的なこれまでの美術館とは正反対。今はまだ自然光が強いので、カーテンを使っていますが、植林した周囲の木々が育ってくればカーテンを取り払い、森の中を歩いている感覚で絵を見ていただけるようになります。木を見ているイメージ



大徳寺塔頭 聚光院 ©Nacasa & Partners Inc.

で私の絵を見ていただく。私の絵を見ている気持ちで、そこにある花や草を見る、そんなイメージです。これは何々の木だな、この小石は面白いな、これは千住博の絵だなと…。植物も絵も同じ視点で見れば、いかに私たちは自然という宝物に囲まれているのだ、本当の豊かさは自分の足元にあることがよく分かるのではないかと思います。

森井◎なだらかな地形の傾斜を生かした美術館で、自然とアートの一体感が素晴らしい。

千住◎人の力で自然をコントロールするのではなく、自然の側に身を置くという考え方ですから、地形に逆らわずに設計されています。また、冬に雪で閉ざされたり、暗くなれば閉館します。こうとうと明かりを照らすのではなく、自然に寄り添うことの素晴らしさを知ってほしいと願っています。

森井◎先生は教育者でもあり、先生の枠を超えた活動や存在が、芸術家を目指す人たちに夢と希望を与えてきています。ご活躍を拝見するたび、日本画の新しい時代が始まっているのを実感しています。

千住◎私はグループ・ホライズンという研究会を主宰しています。この子は伸びる、素晴らしいと思った若い画家たちに声を掛けメンバーになってもらい、30人ほどのグループにのびました。この若い画家たちにもぜひ、注目してほしい。きっと日本の未来を背負っていく若者たちです。

## ■ 人間的探求と芸術的探求

森井◎襖絵をお描きになったり海外で個展をされたり、ニューヨークのメトロポリタン美術館で常設展示されたりと、世界でご活躍されている先生の次のステップとして何か構想をお持ちでしょうか？

千住◎将来やりたいことを、今、やっています。将来こういうものを描きたいけれど、今はこれを描いているというのには現代を生きていることにはならないでしょうか？過去を生きているにすぎません。どんなジャンルでも将来やりたいことを今やるのが現代を生くることなのです。そうすれば意識が開けますし、どんどん新しい興味も湧いてきます。メトロポリタン美術館に日本画が収蔵されたのは昭和初期以来という現実も、日本画に対する強い危機感を抱きました。私の作品の斜め向かいにイサム・ノグチ氏の「ウォーターストーン」という、大きな石から水が静かに流れている彫刻があります。私は滝の屏風を描いたのですが、水音の残響とともに私の絵を見ていただくという趣向で、キュレーターの巧みな演出にも助けられました。現在は、高野山金剛峯寺（和歌山県高野町）の本院の襖絵の制作に取り組んでいます。

森井◎先生は学生時代からいろんな国を放っておられますが、その体験や感動の積み重ねが作品にも反映されているのですか？

千住◎私は人間的探求と芸術的探求は同じ意味だと思っています。人間的感動は芸術的感動でもあるのです。人間とは人と人の間。つまり、気持ちを伝え合うから人間で、魚屋さんが「こんな生きのいい魚が入ったよ」というのも、私が「こんな美しい色の絵を描いたよ」というのも同じ芸術的コミュニケーション。そこに国境や人種やジャンルの壁はなかったのです。だから学生たちにも、自然の側に身を置くことの大切さ、自然の側に軸足を置いていると感じさせることや同じ人間という立場からの発信、ということが芸術家の第一歩だと教えています。

森井◎自然に寄り添い、人間同士の心の通い合いがあってこそ文化は育つということですね。人間的感動は芸術的感動だと考えておられる先生のメッセージが、次代へつながっていくことを祈っています。